

■樋口季一郎 陸軍軍人。満州では、ナチスの迫害を逃れたユダヤ人を救い、アッツ、キスカ島では、非情な決断を迫られた。

ひぐちきいちろう

初の対等条約1888＝

帝国憲法発布1889＝1歳：

淡路島にある兵庫県三原郡本庄村(阿万村)で、奥濱久八、まつの唯一の男子に生まれる。

奥濱家は代々続く廻船問屋で地主という名家であったが、蒸気船の普及に対応できず、また、持ち船が大きな沈没事故を起こしたこともあって、一気に没落、

日清戦争始・1894＝6歳：

八幡製鉄始・1897＝9歳：

Bushidou・・1899＝11歳：

両親が離婚し、2人の姉、2人の妹とともに、母の実家阿万家に引き取られる。その後再婚した父がもうけた3男1女とは異母兄弟になる。樋口家に婿入りし陸軍経理局に勤める(父の弟)勇次の影響で、三原高等小学校を首席で卒業すると、篠山の藩校だった私立尋常中学鳳鳴義塾を経て、

教科書疑獄・1902＝14歳：

日露戦争終・1905＝17歳：

満鉄発足・・1906＝18歳：

韓国反日暴動1907＝19歳：

伊藤博文暗殺1909＝21歳：

大阪陸軍地方幼年学校に入学、次席で卒業。東京市谷の中央幼年学校に進み、同期の石原莞爾、2年後輩の岸田國土と親交、大垣市の、叔父樋口勇次の養子、岐阜県士族の家柄になる。成績上位で卒業。希望の第一師団歩兵第1連隊に配属後、陸軍士官学校に進み、安江仙弘と同期になる。優秀な成績で卒業(第21期)。歩兵第1連隊に復帰し、少尉に任官。猛暑の訓練時には、兵員に木蔭で小休止をとらせるなど、すでに、部下を思いやる姿が見られる。青島行きを夢見て、ドイツ語の習得に没頭、

明治天皇没・1912＝24歳：

大正政変・・1913＝25歳：

第一次大戦始1914＝26歳：

21ヶ条要求・1915＝27歳：

陸軍歩兵中尉に進級。養父の同僚の娘で、東京府立第三高女出の才女丸田静子と結婚。養父勇次がチフスに罹って死去するなか、難関の陸軍大学校に一発で合格、三浪で縁戚の阿南惟幾、石原莞爾と同期になる一方、今度は、ロシアの専門家をめざして、ロシア語を重点的に学び、

民本主義・・1916＝28歳：

ロシア革命・1917＝29歳：

本格政党内閣1918＝30歳：

ベルシー条約・1919＝31歳：

無事に卒業(第30期)。石原莞爾の再婚に際して親代わりとなる。大尉に進級。参謀本部附となり、ロシア班に属すると、東京外语学校夜間部に入ってロシア語を徹底的に学び、陸士3期後輩の秦彦三郎と出会い、生涯交錯する関係に。特務機関員として、シベリア出兵後の日本軍が駐屯するウラジオストクに赴任。新たに発刊された反共ロシア語新聞(ウラジオ・ニッポウ)の主筆になって、情報戦の最前線に立つとともに、ロシア系ユダヤ人の貿易商の家に寄宿して、ロシア人とも親交するが、まもなくハバロフスクに転動し、特務機関長になる。

大暴落・・・1920＝32歳：

徳富蘇峰の「世界大戦後の世界及日本」をロシア語に翻訳するなど、地道なプロパガンダ活動が続けるが、反共産党軍の劣勢が明らかになり、排日運動が強まるなか、帰国。大震災では家族皆無事で、朝鮮軍の参謀になり、この時だけは、家族を連れて現地に赴任。次女節子が誕生。少佐に進級。ロシア通として知られるようになり、母まつが死去する直前、ポーランド公使館駐在武官となり、ワルシャワに赴任。社交界も苦にせず対応し、ヨーロッパ各地を視察して、情報収集に努める。社交界出入りが日本で悪い噂になったため、妻静子と呼び寄せる。韓国最後の皇太子李垓が方子女王とともにポーランドに立ち寄った際には、応接に奔走。秦とともに、ユーカサス地方を旅行していた途中、貧しい集落に立ち寄った際、ユダヤ人の老人から、ユダヤ人が世界中で迫害されている事実と、日本の天皇こそ救世主に違いないと涙ながらに訴えられたことが心に残り、

原敬首相暗殺1921＝33歳：

水平社結成・1922＝34歳：

関東大震災・1923＝35歳：

護憲三派圧勝1924＝36歳：

治安維持法・1925＝37歳：

母まつが死去する直前、ポーランド公使館駐在武官となり、ワルシャワに赴任。社交界も苦にせず対応し、ヨーロッパ各地を視察して、情報収集に努める。

円本時代始・1926＝38歳：

金融恐慌・・1927＝39歳：

社交界出入りが日本で悪い噂になったため、妻静子と呼び寄せる。韓国最後の皇太子李垓が方子女王とともにポーランドに立ち寄った際には、応接に奔走。秦とともに、ユーカサス地方を旅行していた途中、貧しい集落に立ち寄った際、ユダヤ人の老人から、ユダヤ人が世界中で迫害されている事実と、日本の天皇こそ救世主に違いないと涙ながらに訴えられたことが心に残り、アメリカを経由して帰国。中佐。静岡の歩兵第41連隊赴任直後、同隊が中国の青島に派遣され、三女不二子が誕生。治安維持活動した後、帰国。東京の技術本部の新聞班員となり、空しい日々。参謀本部で上司だった橋本虎之助少将に招かれ、東京警備司令部参謀に転じ、

共産党事件・1928＝40歳：

世界恐慌・・1929＝41歳：

海軍軍縮条約1930＝42歳：

満州事変・・1931＝43歳：

盟友石原莞爾が満州事変を起こしたことに戸惑い、橋本欣五郎が発起した{桜会}に、同じロシア畑の縁で参加するも、決裂。中央幼年学校の1年後輩の相沢三郎が北一輝を伴うなど、皇道派の訪問も絶えず、4女智恵子が誕生。{大亜細亜主義協会}の幹部になるも、満州国のあり方に疑義。大佐に昇進し、福山の歩兵第41連隊長になる。部下になった相沢の革新熱を抑えるのに苦勞し、上層部に台湾転任を進言して後、第三師団参謀長として、満洲国の、ユダヤ人の多いハルビンに赴任直後、相沢が統制派の永田鉄山軍務局長を斬殺する事件を起こし、自分の責任と進退伺いを出す、上官の小磯国昭に慰留される。

国際連盟脱退1933＝45歳：

芥川直木賞始1935＝47歳：

二・二六事件の契機ともされる相沢は銃殺刑になった。第三師団は名古屋に帰還。二・二六事件の後継下にも上層部に台湾転任を進言して後、第三師団参謀長として、満洲国の、ユダヤ人の多いハルビンに赴任直後、相沢が統制派の永田鉄山軍務局長を斬殺する事件を起こし、自分の責任と進退伺いを出す、上官の小磯国昭に慰留される。

二二六事件・1936＝48歳：

日中戦争始・1937＝49歳：

同盟国になったばかりのナチス政権下のドイツを視察旅行後、少将に進級して、ハルビの特務機関長になる。極東ユダヤ人協会代表で親日家のアブラハム・カウフマンの要請を受けると、同期の安江の奔走を得て、第1回極東ユダヤ人大会を実現、ナチスの反ユダヤ政策を批判する演説し、ユダヤ人に感銘を与えた。ドイツの迫害下から逃れ、当時唯一のビザ無し受入れ地上海租界に向かうべく、ソ満国境沿いにあるシベリア鉄道のオトボール駅まで来ていたユダヤ人18人が、入国の許可を渋る満洲国に足止めされているのを、カウフマンから相談を受けると、熟慮の上、失脚を覚悟して、給食と衣類・燃料の配給や加療を実施した上、満鉄総裁松岡洋右に直談判して了承を取付け、満鉄の特別列車で上海に脱出させた(オトボール事件)。以後3年、ユダヤ人たち“ヒグチ・ルート”を頼るユダヤ人難民は増え続け、日独間の外交問題となり、陸軍内部でも処分を求める声が高まるが、関東軍参謀長東条英機中將が理解を示して不問としたことから、立ち消えになった。参謀本部第二部長に就任後、汪兆銘を重慶から脱出させて、

健保+総動員1938＝50歳：

東京に迎え、滝野川の古河虎之助男爵別邸に匿う。ノモンハン事件では、停戦努力し、“臆病軍人”と呼ばれる。中將に昇進し、金沢の第九師団長として、満洲の牡丹江に駐屯、

第二次大戦始1939＝51歳：

日米開戦・・1941＝53歳：

・・・・・1942＝54歳：

真珠湾攻撃を知った際には、皆で万歳三唱するも、戦争の将来へは不安を感じたという。札幌の北部軍司令官となり、北東太平洋陸軍作戦を指揮。アメリカへの睨みをきかすべく占領し続けるアッツ、キスカ島であったが、米軍の反攻が高まって、物資の補給もできない状態に、

創価学会検挙1943＝55歳：

大本営による増援を求めるも破棄されるなか、戦うように命じたアッツ島守備隊は玉砕、部下の命を救えず、生涯の負い目になる。キスカ島撤退作戦に際しては、海軍側からの要請に応じ、自らの一存で、キスカ島守備隊に命じ、無血撤退を成功させる。帰還後には、わざわざ海軍の木村昌福少将にお礼に行くなど、大戦中には稀有な、陸海軍の見事な連携であったが、以後、体軀はみるみる痩せ細って行く。

年金+総武装1944＝56歳：

敗戦・・・・1945＝57歳：

北方軍が改編された第五方面軍司令官になり、北部軍管区司令官を兼ねる。終戦宣言に、指揮下の全将兵に戦闘中止命令を出すも、対日参戦したソ連の攻撃は止まず、占守島、南樺太の抗戦を指揮、ようやく停戦に持ち込むも、スターリンから戦犯指名、復員業務も終わり、無官となる。小樽市外朝里に隠遁。米軍CIC隊長による、戦時の捕虜虐待等の調査で、終戦時の処理を含めて、一つの不正もなかったことから、米軍の特別顧問への打診もあったが、当然のごとく固辞。戦犯問題もは、世界ユダヤ人会議が、ユダヤ人コミュニティーを動かし、世界的な規模で救済運動が展開された結果、GHQのマッカーサーはソ連からの引渡し要求を拒否したのである。

新憲法公布・1946＝58歳：

極東裁判に関連して、東條英機を、“彼は善悪では善であったが、賢愚では愚であった”と評していた。

極東裁判決・1948＝60歳：

新憲法施行・1947＝59歳：

三大事件・・1949＝61歳：

独立回復・・1951＝63歳：

国連加盟・・1956＝68歳：

安保闘争・・1960＝72歳：

いざなぎ景気1966＝78歳：

関東軍総司令官としてシベリアに抑留されていた秦が、ようやく復員。神奈川県小林市へ転居後も、事実上の隠遁生活が続けて行く。

この間、過去は語らず、アッツ島の風景を描いた水彩画の前で毎朝、戦死者の冥福を祈り、静かにロシア語の本を読み、トルストイの「アンナ・カレーニナ」の全訳に挑戦し、やり遂げてたりしている。

震ヶ関ビル・1968＝80歳：

全共闘闘争・1969＝81歳：

大阪万博・・1970＝82歳：

アッツ島戦没者慰霊除幕式に参列、なお、遺族たちに詫びて、

東京の白山に転居して、まもなく、老衰で没した。日本イスラエル協会から、名誉評議員の称号が贈られ、「アツキスカ軍司令官の回想録」が遺された。

Wikipedia, 早坂隆「指揮官の決断 満州とアッツの将軍 樋口季一郎」,